

12/9/18 「主に会う日を待ち望みながら」 ピリピ 3:17-4:1

### Introduction

- 前回、私たちはもう約一ヶ月前になりますが、パウロの教えをピリピ 3:12-16 から学びました。
- 何を学んだか覚えておられるでしょうか？
  - 信仰のレースを最後まで忠実に走り切るための秘訣について学びました。
  - 真のクリスチャンは例外なく皆、ただ一つのゴールを目指して走っていると。
    - ピリピ 3:13-14
  - クリスチャンの歩みはある意味、非常にシンプルだったわけです。
    - キリストの栄冠を得るために、よりキリストに似た者に、日々御言葉を学び、そして実践しながら変わっていくことでした。
    - 誰一人としてこの目標に完璧に到達した人はいませんでした。
    - あのパウロでさえ、自分のことを、「私はすでに完全にされているのでもありません」と言い表したのです。
    - だからこそ、彼はキリストの栄冠を得るそのたった一つの目的のために走り続けていたわけです。
  - そして、このパウロは、自分の前に置かれた信仰のレースを死ぬ最後の時まで、熱心に走り切ったわけ

です。彼が最後に書いたテモテの手紙に、こう記しています。

#### ■ 2 テモテ 4:6-7

- 「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」
- 彼はどんな困難な状況にあっても、忠実にゴールラインまで走り切りました。
  - そして同じことが、今、私たち一人一人に問われているわけです。私たちは誰一人として既に完全にされた人はいません。皆、聖さを追い求めて歩み続けている訳です。だからこそ、信仰のレースを最後まで忠実に走り切るようにと命じられていたのです。
- さて、今日皆さんと見たいのはこの続きです。
  - もう一度、今日の聖書箇所をお読みします。
- さて、読まれた皆さんはすぐに気付かれたことだと思いますが、パウロは 17 節で、まずピリピのクリスチャンに次のような命令を記しました。
  - 「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、…私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」
- 12-16 節の中で最後まで忠実に歩むようにと命じたパウロは、今度はその歩みの中にあって、パウロや他の忠実に歩む者たちを模範にすることの必要性を説いたわけです。

- しかし、少し考えてください。そもそも一体なぜパウロはこのように勧める必要があったのでしょうか？
  - ほんの今、ピリピの兄弟達にただ一点を目指して走り続けなさいと命じたところだったわけです。
  - シンプルな命令ではないでしょうか？
  - この命令だけで十分ではないのでしょうか？
- もちろん、これには明確な理由があったわけです。
- パウロはなぜ彼らの歩みにあって模範が必要だったのか、その理由を二つ続けて記しています。
  - ピリピのクリスチャンたちはそのような模範を必要とする状況に置かれていたのです。
  - 二つの現実がこの教会の人々を取り巻いていたのです。
    - では、一体それは何だったのでしょうか？
- 今日皆さんと共に特に学びたいことはまさにこの点です。
- なぜなら、時代は変われども、私たちは今現在、ピリピの教会の人々が経験していた同じ現実と直面しているのです。
- 私たちもキリストに似た者となるために、聖さを追い求めていく過程にあたって、今日このパウロがピリピのクリスチャンに教えた真理が必要なのです。
- ですから、このメッセージが皆さんの信仰を再び正しく吟味し、そして再びキリストに会う日を心から待ち望みながら、今を忠実に生きる者へと共に成長していくことに繋がることを祈っています。

## I. 命令：模範に習うこと(v17)

- さて、まず理由を詳しく見ていく前に、そもそもの命令を簡単に考えてみましょう。
- 17節もう一度見てください。パウロはまずこう言いました。「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」
  - もちろん、ここでパウロは自分自身のことを威張ってこう言ったのではないことは明らかです。
  - これまでに見たように、パウロは自分自身がまだ不完全であることを知っていました。
    - 自分自身が不完全であったパウロは同じように、キリストをより知ることを追い求めて生きていたわけです。
    - 自分自身がただ一つのゴールを目指して走り続けていたわけです。
  - ですから、ここでパウロは自分のことを指して、「見なさい。私は完璧です。だから私を真似なさい。」と言ったわけではないということです。
  - むしろ、パウロは自分自身がキリストの聖さを追い求めて歩むその一員であることを自覚していたがゆえに、他のクリスチャンを励ましたのです。
    - なぜなら、究極的に言えば、クリスチャンというのは皆、同じ目標を目指して歩んでいるものだからです。
      - 1コリント 11:1

- 「私がキリストを見習っているように、あなたがたも私を見ならってください。」
  - ですから、パウロはキリストを模範として歩んでいました。
  - だからこそ、他の兄弟達を励ましてこういったのです。「兄弟、私がしていることを注意して見ていなさい。なぜなら、私がすることはキリストが為さることだからだと。私自身もキリストを習って生きているのだと。」
  - パウロは自らの身をもって、キリストに従うとはどういうことかを具体的に現していたのです。
- またパウロは自分自身だけを指して、見習いなさいとは言いませんでした。
- 続けて、彼と同じように忠実に歩むクリスチャンを指して、そのような人たちの歩みにも目を留めるようにと促したわけです。
  - 恐らく、ここでパウロはテモテや、2章に出てくるエパフロデトと言ったような人物のことを指しているのではないかと考えられています。
  - しかし、いずれにしてもここでのポイントは明白です。
  - ピリピの教会の人たちが置かれた状況をしっかりと理解してパウロは、靈的に正しい歩みをしている者の例に従うようにと命じるわけです。
- 要するに、彼らにとって、このようなキリストに従っていくときの模範というものが必要だったと言うことです。
- そして、同時にこれは私たちにも当てはめて言うことがいえるわけです。
  - 確かに、私たちは皆、御言葉を学び、そしてキリスト覚えて日々歩いていく者たちです。
  - しかし、ときに、あまりにも聖書で神が教えることが難しく感じたり、あまりにもキリストのもうける基準が高くて、自分にはこんなことなんてできないと感じたことはないでしょうか？
  - キリストのように歩もうと思っても、罪のある私たちには同じように生きていくことが絶対にできないと自分の罪に対して絶望感を覚えたりしたことはないでしょうか？
- 皆さん、パウロは私たちと同じ思いを抱いていたわけです。時に私たちはパウロが何か特別で、私たちとは別の世界の人のように考えてしまったりしませんか？
- パウロも同じように、罪の葛藤を覚えて歩んでいた様子を私たちは色んな彼の著書の中から見る事ができるわけです。
  - ローマ 7:15,24
    - 「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。…私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

- 私たちと同じように罪との葛藤を抱き、苦しんでいたパウロ。しかし、彼はいずれ神がこの罪に汚染されたみじめな身体を、栄光のからだへと取り替えてくださることを信じて疑うことはなかったわけです。
- そして、葛藤を経験しながらも、いつも、より聖く、キリストにより似た者になるために日々歩んでいたのです。
- 素晴らしい模範だと思いませんか？ここで皆さん一人一人にチャレンジしたいことそれは…
  - あなた自身は他のクリスチャンにとっての模範として生きているのでしょうか？
  - パウロや、またこの当時忠実に歩んだ者たちのように、あなたは自分を指して、「確かに私自身もまだまだ不完全だけれども、自分がキリストを習って歩んでいるように私を見習ってください。」と言えるのでしょうか？
  - また、兄弟姉妹だけではなく、あなたの家族、友人、周りの未信者にあなたの行動はどう映っているのでしょうか？
    - その人たちが、あなたのことを指して、この人は本当の慶びと満足を持っている。一体どこからその源はきているのだろうか？と疑問を抱くのでしょうか？
    - それとも、あなたを指して、この人は色んな事を言うけれども、全く行動の伴わない偽善者だと言うのでしょうか？

- 少し問いかけてみてください。あなたの信仰は、キリストのかぐわしい香りをこの世にあって放っているのでしょうか？それとも、悪臭、いやむしろ全くこの世と変わらない無味無臭でしょうか？
- 私たちはキリストの模範に従うだけでいいのではありません。この世にあって同じようにキリストを証するように、自らが神の素晴らしさを現す模範として生きていかなければいけません。

## II. 二つの理由：なぜ命令が必要だったのか(vv18-21)

### 1. キリストの十字架の敵として歩む者の存在(vv18-19)

- さて、パウロがどのような命令をしたのかを見た今、ではなぜ、彼がそう言わざるを得なかったのか二つの理由を考えていきましょう。
- もう一度、18節を見てください。
  - 「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」
- なぜパウロが模範に習うようにと命令したのか、一つ目の理由は、キリストの十字架の敵として歩む者が存在していたからです。
  - ピリピの教会の中、兄弟姉妹の中に、敵が紛れ込んでいることをパウロは気付いていたのです。
  - このキリストの十字架の敵が一体誰を指しているのか、それには色々な考えがあります。ある人は、救いを得るためには律法を守る行いが必要だと、救い

の恵みを否定するユダヤ主義者でないかと考える人もいます。ある人はその対局、恵みによって救われたがゆえに、全く律法を守る必要がないと自分の欲望のままに、神に喜ばれない生活を送っていた反律法主義者ではないかと考える人もいます。

- しかし、皆さんに注目して欲しい点が二つ、ここにはあります。それは、「涙をもって」と「多くの人々が」というパウロの言葉です。
- よく聞いてください。ここにはショッキングなことが書かれています。このキリストの十字架の敵として歩んでいた人物達、自分はクリスチャンだと告白しているような人物であり、そしてその数は多くいたということです。
  - パウロはこの人たちのことを知っていたわけです。いや、かつて兄弟姉妹と呼んだ仲だったことでしょう。だから、彼はこの人たちのことを思うとき涙を流したのです。
- 明白なのは、この敵として歩む者は…
  - イエスキリストの福音を公に非難するような者ではない。
  - イエスが自分の罪のために死なれたということをしているだけでなく、受け入れているわけです。
  - そして、言葉ではイエスを主であり救い主であると認めるのです。
  - しかし、
    - 彼らの生活がそれを否定するわけです。
- 主のためにと言いながら、様々な働きをしているかもしれませんが。
- しかし、彼らの心が本当の意味で変えられていないのです。
- マタイ7でイエスが言った言葉を覚えていますか？
  - マタイ7:13-14
    - 「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」
  - ここでイエスが言わんとしたポイントは明らかです。
    - 半分はキリストに仕え、半分はこの世に仕えるような中途半端な弟子を神は求めています。
    - 残念ながらある人は、狭い門から入りさえすれば、後は広い道が待っているかのように行動する人もいるわけです。救われた者はもう自由に自分の好きなことをしてもいいのだという風に考えるわけです。
    - しかし、覚えなければいけないのは、イエスは弟子となるためには自分を捨て、ただ一度自分の十字架を負ってついてきなさいとは言わなかったということです。代わりに、日々自分の十字架を負いついて来なさいと言われたわけです。

- イエスの弟子として歩むことには、確かに困難が伴うわけです。
  - しかし、全く神の救いの恵みを正しく理解し、感謝しているものはどんな犠牲を払わなければいけなかったとしても、喜んで主のために仕え、全てを主に捧げるわけです。
- これを聞いてある人はクリスチャンになるということは何かこの世にある幸せを逃すかのように考えるわけです。
- この世には数え切れない満足や喜びがあって、キリストに全てを捧げることはそれを得る機会を得ることを捨てるかのように。
- でも、どうですか？この世には本当の幸せなど存在しているのでしょうか？私たちを一時的には喜ばせ、満足を与えるものはたくさんあるでしょう。
- しかし、本当に私たちの心を満足させ、絶えることのない喜びであふれさせてくれるもの、それはキリストの内にしかないわけです。
- 私たち主を愛する者にとって、確かに世の中には色々な満足をもたらすことができそうなものが存在する中、こういうわけです。「キリストの十字架によって神が与えてくださった救いの恵み、それだけで十分です」と。「それだけが私にとって必要なんだ」と。
- 残念ながら、このピリピの教会の中には、このキリストの十字架の恵みに対して敵対する人々が多かったのです。
- パウロはこれらの人物に関して4つの特徴を19節で付け足しています。
  - 1. 彼らの神は彼らの欲望
    - 彼らは真の神を礼拝しようとは思いません。
    - それだけでなく、神が望まれることより、自分たちの望むままを行う、そのような人物達です。
  - 2. 彼らの栄光は彼ら自身の恥
    - 彼らはキリストだけを誇るべきであるのにも関わらず、それ以外のものを誇り、その結果自分に恥を招くわけです。
  - 3. 彼らの思いは地上のこと
    - 彼らは口ではキリストを追い求めているというかもしれませんが。
    - しかし彼らの生活を神のことを求めず、この世で自分を満足させることを捜し求め続けているのです。
  - 4. 彼らの最後は滅び

- そして、それらの結果として、その信仰が本物ではないので、彼らは地獄にあって、神の燃えるような怒りを罰として受けるのです。
  - ピリピのクリスチャン達はこの現実と向き合わなければいけなかったのです。
  - 教会の中にキリストの十字架の敵として歩む者たちがいたのです。
  - そして、今の時代を生きる私たちもこの問題と深く関係するのです。
  - キリストに似た者になるという聖化の過程において、私たちはこのような誘惑に打ち勝たなければいけないのです。
    - 自分の望むことをすればと語りかけてくるかもしれません。
    - キリスト以外に満足があるかのように惑わしてくるかも知れません。
  - どのようにしてそれに勝利するのか？
    - パウロはだからこそ、キリストを一直線に目指すその生き方の模範を見せ、私の後をついてくるようにと命じたのです。
2. 天に国籍を置く者としての責任(vv20-21)
- パウロが命令した二つ目の理由それは、天に国籍を置く者として歩む責任が存在していたからです。
  - もう一度 20 節見てください。
    - ここでパウロは、「私たちの国籍は天にあります」と言いました。
    - ここで大切なのは、「私たちの国籍は天にあるでしょう」と未来のことを指しては言わなかったということです。
    - パウロはピリピの人たちに、「あなたたちはもう既に天に国籍を持つ者とされている」ということを伝えたのです。
- 二つの大切な真理を私たちはここから学ぶことができます。
    - 1. 天に国籍を既に持っているという事実は、私たちの目を天のことにのみ向けさせる
      - 言い換えれば、天に国籍を置く者は、地上のことに囚われることはないということです。
      - 皆さんもよく知っているマタイ 6:19-21
        - 「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」
        - 最後の言葉聞きましたか？

- あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるのですと。
  - 兄弟姉妹の皆さんもし、私たちが真のクリスチャンであるならば…
    - 私たちの名前はもう既に天に刻まれ
    - 私たちの資産は天に既に貯えられ、
    - 私たちの報いは既に天で待ち、
    - 私たちは既に天国のメンバーに加えられ、
    - そして、その天で私たちの救い主イエスキリストが私たちのことを待っていてくれるのです。
  - 天に国籍を置く者は先ほど見たようなこの地上のことに関心を抱くような人物とは異なります。
  - 確かに今、この地上で生きている者です。しかし、心の目は常に、天のことに向いているのです。
- 2. 天に国籍を既に持っているという事実は、私たちに未来への希望を与える
- 続けて、パウロはこういうわけです。
    - 「そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑し

いからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」

- 真のクリスチャンはイエスが再び帰ってきてくださる日を心待ちにしながら、耐え忍ぶ者です。
- たとえどんな困難があったとしても、その中であって喜びを見いだすことができるのです。
- なぜか？
- キリストが帰ってこられるその時、私たちの古いからだは新しい栄光のからだへと変えられることを信じているからです。
- 今、私たちの持っている身体は…
  - 弱さ
  - 病
  - 死
  - 悲しみ
  - 絶望
  - 苦しみ
  - 恐れ
  - そして罪に支配されているわけです。
- それゆえに、私たちは苦しみを覚え、
- 葛藤を覚え、時には希望や喜びをあまりの苦しみや試練のゆえに失ってしまいそうになるわけです。



- しかし、キリストが再び帰ってこられるとき、私たちの身体はキリストの持つ栄光の身体へと変えられるのです。
  - 1 ヨハネ 3:2
    - 「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」
  - 皆さん、私たちはキリストに似た者になるのです。
  - そこにはもう涙や痛みはありません。
  - ただこの世の言葉では表現できない喜びに満たされ、私たちの主との交わりをいつまでも天で楽しむのです。
  - これが、私たちが今持っている将来における希望です。
- もし、これが私たちの今持つ希望であるならば、私たちの責任は一体何でしょうか？
- 私たちの責任は信仰の模範に習って、キリストに似た者と日々忠実になっていくことです。

## Conclusion

- パウロがキリストにどんな時も目を置いて歩んだように、私たちもキリストにのみ目を置いて歩いていかなければいけないのです。
- ピリピの教会の人々のようにこの世に幸せを見いだすようにと誘惑や、本当の福音から離れるように惑わしが、今日私たちが生きていけば、色んなところで経験することでしょう。
- 特に、今のこの世の中多くの素晴らしいもので満ちあふれています。それらがあなたの心を揺るがすかも知れません。
- しかし、私たちはどんなときも天に目を向けて歩いていくのです。
- たとえ今苦しみ、試練を経験したとしても、忠実に歩みきった者に待っている天での報いは大きいのです。
- キリストは必ず帰ってこられる。そしてその時、私たちは新しい身体を与えられ、神を永遠に誉め称えるのです！